

修士論文（要旨）

2014年7月

加熱調理用語に関する日中対照研究
—運用及び意味分析を中心に—

指導 佐々木倫子 教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

212J3008

高維

目次

第一章 研究の背景と基本概念	1
1.1 研究背景と研究課題	1
1.2 研究方法及び研究の意義	2
1.3 基本概念	2
1.3.1 加熱調理用語及びその基礎語について	2
1.3.2 加熱調理用語における中心的基礎語彙	3
1.3.3 語彙素と意義素・意味特徴	3
1.3.4 加熱調理用語に関する先行研究	4
1.3.5 「概念的意味」と「非概念的意味」	5
第二章 調査概要	6
2.1 調査1 加熱調理用語に関するアンケート調査	6
2.2 調査2 加熱調理用語のコーパス調査	7
2.3 調査3 加熱調理用語の運用調査	8
第三章 調査1の結果	11
3.1 協力者プロフィール	11
3.2 調査結果	11
第四章 調査2の結果	15
4.1 使用頻度調査	15
4.2 加熱調理用語の意味構造に関する考察	16
4.2.1 意味特徴及び出現頻度	16
4.2.2 中国語加熱調理用語の意味構造に関する考察	18
4.2.3 日本語加熱調理用語の意味構造に関する考察	31
第五章 調査3の結果及び加熱調理用語に関する日中対照分析	38
5.1 協力者のプロフィール	38
5.2 中国人協力者向けの加熱調理用語の運用に関する調査結果	39
5.3 加熱調理用語に関する日中対照分析	40
第六章 中国人協力者インタビュー	46
6.1 回答結果（個人）と注目した意味特徴	46
6.2 誤用要因	60
第七章 まとめと今後の課題	63
7.1 まとめ	63
7.1.1 中国語加熱調理用語の中心的基礎語彙	63
7.1.2 加熱調理用語の意味構造及び日中対照分析	63
7.1.3 中国人協力者の誤用要因	64
7.2 今後の課題	65
参考文献	
資料	
資料1 調査1のアンケート 中国語版	
資料2 調査1のアンケート 日本語版	

要 旨

第一章 研究の背景と基本概念

食が人間の日常生活における重要な活動であることと加熱調理用語に関わる誤用が多発することは、在日中国人の日常生活に影響を与えている。本研究では、日常的に使用される加熱調理用語に何があるか、日中両言語の加熱調理用語の共通点と相違点はなんであるか、中国語母語話者が日本語加熱調理用語を誤用する原因はなんであるか、の3つの課題を追究した。

基本概念の節では、研究対象の呼称と範囲、分析の視点、分析の方法の3点について、先行研究を考察した。まず、先行研究で使用された呼称の問題点を見た上で、本研究では研究対象を「加熱調理用語」とした。また、伊藤（1974）の記述を参考にし、研究対象の範囲を中心的基礎語彙に限定した。次に、分析の視点に関しては、伊藤（1974）の語彙素の定義と、国広（1982）の意義素・意味特徴について考察し、分析を進めるにあたっては、天野（2003）、伊藤（1974）、国広（1982）を参考にした。さらに、本研究では加熱調理用語の運用における人の認識を考察するため、中野（2012）の「概念的意味」と「非概念的意味」を参考にした。

第二章 調査概要

調査1では、80人の在日中国人に対して「知っている中国語加熱調理用語」に関するアンケート調査を実施した。目的は、中国語加熱調理用語の中心的基礎語彙を抽出することにある。調査2では、まず中国語コーパスを利用し、調査1で得た結果を検証した。中国語加熱調理用語の中心的基礎語彙を選定する目的である。次に、両言語のコーパスの例文を分析し、加熱調理用語の意味分析を行った。調査3では、加熱調理場面を表すビデオを用い、日中の協力者の加熱調理用語の運用上の問題を分析した。目的は、加熱調理用語の日中対照分析の対象を選定することと中国語母語話者が日本語加熱調理用語を誤用する要因を解明することにあった。

第三章 調査1の結果

80人の在日中国人調査から、66件の有効回答を得た。一人当たりの平均回答数によって、中国語加熱調理用語の中心的基礎語彙の数は9に近いことが分かった。回答の上位9位の語は、「烧」、「炒」、「煎」、「煮」、「炸」、「蒸」、「烤」、「焯」、「炖」である。

第四章 調査2の結果

まず、調査1で抽出された9語に対して中国語コーパスで使用頻度を再検証した。その結果、使用頻度が上位9位にあがった語は調査1の結果に一致した。次に、両言語のコーパスの例文を分析することによって、【加熱媒体】、【素材】、【動作】、【火力】、【加熱時間】、【道具】と言う6つの意味特徴を形成する項目を抽出した。最後に、抽出された意味特徴に基づいて、各語に対する構造的意味分析を行った。

第五章 調査3の結果および加熱調理用語に関する日中対照分析

調査3では、加熱調理場面を表すビデオを用い、日中の協力者の加熱調理用語の運用上の異同を考察した。日中の協力者の回答を分析し、加熱調理用語の日中対照分析の対象を選定した。続いて、調査2での意味分析をもとに加熱調理用語の日中対照分析を行った。その結果、日中両語の加熱調理用語の語彙体系における共通点と相違点を明らかにした。

第六章 中国人協力者インタビュー

調査3での回答理由について中国人協力者にフォローアップインタビューを実施し、中国人協力者が加熱調理用語を運用する際に注目した意味特徴と加熱調理用語を誤用する要因を分析した。分析から中国人協力者が加熱調理用語を運用する際に【加熱媒体】、【動作】、【道具】、【素材】の4つの意味特徴に注目したことが分かった。また、中国人協力者が加熱調理用語を誤用する要因を(1)画面に現れる意味特徴を無視した(2)意味特徴に関わる内容を誤読した(3)日中両言語間の転移(4)個人差、の4点にまとめた。

第七章 まとめと今後の課題

最後に、今後の課題に触れる。本研究では、調査2ではコーパスを利用したため、加熱調理用語の使用例は書き言葉に限られる。また、調査3の調査方法の限界により協力者の実際の調理場面での加熱調理用語の運用を反映したとすることは難しい。なお、研究背景の部分で、加熱調理用語の運用に関する問題が起こった原因について、文化・社会的背景を提示したが、そもそも、「文化・社会的背景」がどのようなものであるかに関する考察及び分析をまとめていない。

以上から、加熱調理用語の実際の運用に関する考察、日中両国の食文化及び調理文化に関する対照研究を将来的課題としたい。

参考文献

- 天野かおり (2003) 「加熱調理操作における語彙体系の考案：『煮る』世界」『上智大学国文学論集』 第36号 上智大学 pp. 55-77
- 石綿敏雄・高田誠 (2000) 『対照言語学』 おうふう
- 今井むつみ (2010) 『ことばと思考』 岩波新書 pp. 24-33
- 伊藤幸一 (1974) 「現代日本語における基礎加熱料理語彙の構造的意味分析試論」『國學院大学紀要』 第17号 國學院大学 pp. 58-83
- 今仁生美・金水敏 (2000) 『現代言語学入門 4 意味と文脈』 岩波書店
- 沖森卓也 (2012) 『語と語彙』 朝倉書店
- 川本茂雄 (1979) 『意味・語彙』 大修館
- 国広哲弥 (1970) 『意味の諸相』 三省堂
- 国広哲弥 (1982) 『意味論の方法』 大修館
- 真田信治 (1977) 「基本語彙・基礎語彙」大野晋・柴田武編『岩波講座 日本語 9 語彙と意味』 岩波書店 pp. 87-124
- 新村出 (2008) 『広辞苑 第六版』 岩波書店
- 中野弘三 (2012) 『意味論』 朝倉書店
- 細川英雄 (1997) 「言語習得における〈文化〉の意味について」『早稲田大学日本語教育研究センター紀要』 第9号 早稲田大学 pp. 1-19
- 本間美奈子 (2008) 「日本語・フィンランド語における加熱調理動詞群の意味の対照研究—〈あげる〉の対応を中心に」『國學院大学大学院紀要 文学研究科』 第40号 國學院大学 pp. 209-223
- 宮島達夫 (1977) 『岩波講座 日本語 9 語彙と意味』 岩波書店 pp. 1-37
- 余田弘美 (1995) 「〈研究資料〉江戸時代の加熱調理語彙に関する報告：料理書を資料として」『兵庫女子短期大学研究集録』 第28号 pp. 1-9

参考 URL

- 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス 中納言』
<https://chunagon.ninjal.ac.jp/login> (最終検索日 2014年6月25日)
- 中国国家言語文字作業委員会『語料庫在線——現代漢語語料庫検索』
<http://www.encycorpus.org/CCindex.aspx> (最終検索日 2014年6月25日)
- 独立行政法人 日本学生支援機構(2012)「平成23年度 私費外国人留学生生活実態調査」
<http://www.jasso.go.jp/scholarship/documents/ryujchosa23p00.pdf>
(最終検索日 2014年7月6日)